

英語の多様性について教える 観点からみる通訳ボランティア育成

矢 頭 典 枝

Nurturing Volunteer Interpreters from the Perspective of Teaching Diversity of English

Norie YAZU

The aim of this article is to present what the author learned from teaching diverse English varieties of the world in the *Volunteer Interpreter Seminars*, held since 2015 by seven “foreign (international) studies universities” or “Gaidais,” as part of their joint project to promote Olympic values towards the Tokyo 2020 Olympics and Paralympics. This article first overviews how the study of English of the Japanese population is affected by the nation’s mission of hosting the Olympics. The main part of this article describes the features of a free English website called the “KANDA×TUFS English Modules,” which provides users with opportunities to learn linguistic and cultural differences in English varieties of the world, and the validity of its use in the aforementioned seminars. Then it describes how the author teaches the course of diversity of English using this website. Finally it examines the reactions of the participants and concludes with some remarks related to further development of this project.

キーワード：2020年東京オリンピック、通訳ボランティア、英語教育、英語モジュール、英語の多様性

はじめに

2020年夏季オリンピック・パラリンピックの開催都市を決定する国際オリンピック委員会（IOC）総会が2013年9月にブエノスアイレスで開催され、東京が開催地に決定して以来、招致プレゼンテーションで使われた

「おもてなし」という語が訪れる人々を暖かくお迎えするキーワードとして脚光を浴びた。その直後、神田外語大学はそれまでの「スポーツ通訳」の実績を生かし、東京オリンピックに向けて通訳ボランティア育成セミナーの開催準備に動き出し、2015年8月に第一回目のセミナーを開催するに至った。本セミナーにおけるキーワードも「おもてなし」である。筆者は講師としてこれまで数回にわたって開催された本セミナーに参加し、神田外語大学と東京外国語大学が共同開発した「KANDA×TUFUS 英語モジュール」を活用し、世界の7つの英語の言語学的特徴について教えてきた。これらの講義を通して、アメリカ英語を規範とする日本の英語教育を受けてきた受講者たちに対し、筆者が主張してきたのは、英語の多様性を前向きに捉え、尊重する姿勢をもつことが「英語によるおもてなし」だという点である。

本セミナーについての論考としては、本セミナーの概要、設立の背景と初期の展開、日本の英語教育との関係を中心に論じた Yazu (2016) があるが、本稿では、まずオリンピックと日本人の英語学習について概観し、「KANDA×TUFUS 英語モジュール」の概要について触れた後、本セミナーの講師という立場から、授業実践と受講者たちの反応についてまとめ、グローバル人材育成を目指す当セミナーが回を重ねるごとに見えてきた課題について考察する。

1. オリンピックと日本人の英語学習

1964年の東京オリンピック開催が決定した直後、1960年代の日本ではオリンピック・ムードのなかで英語学習熱が高まり、大学における英語関連の学科や英会話学校の設立が目立った。日本英語検定協会(「英検」)が創設されたのも東京オリンピックの前年の1963年であった¹⁾。

そして2020年の東京オリンピック・パラリンピックが近づくなか、再び英語学習熱が高まっている状況が観察される。しかし、1964年と現在では、日本人の英語学習を取り巻く環境が異なることを指摘したい。前回の東京オリンピックでは、日本はまだ敗戦の影を引きずっていた時代であり、立ち直った姿を訪れる多くの外国人に見せたいというムードのなかで

英語学習熱が過熱したが、日本人の英語学習の環境はまだ緒についたばかりであった。例えば、英検は創立当初、1級、2級、3級しかなかったが、その後、1966年に4級、1987年に準1級と5級、1994年に準2級と児童英検が新設され、2016年度実施分の志願者数は300万人を超えた（公益法人日本英語検定協会、2017）。また、1979年にTOEICが日本で創設され、2016年には年間受験者が270万人を超えるテストに成長した²⁾。中学校と高校における英語学習はもとより、このように、今や英語学習は幅広い層の日本人に定着している。

他方で、小学校教育においては、1998年に改定された学習指導要領によって国際理解教育の一環として「総合的な学習の時間」が設けられ、体験的な英語活動が行われるようになった。文部科学省はその後、2008年の学習指導要綱で小学校第5学年と6学年における外国語活動を新設した（文部科学省、2008）。『小学校指導要綱解説』では「外国語活動」としているが、本解説に記載されている外国語の会話例が英語であることにも示唆されるように、「外国語」とは「英語」を指す、と見てもよい。さらに、2020年夏季五輪の東京開催が決まった直後の2013年12月、文部科学省はすぐに動き出し、『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』を発表した。以下はその序文である。

初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る。

2020年（平成32年）の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、新たな英語教育が本格展開できるように、本計画に基づき体制整備等を含め2014年度から逐次改革を推進する（文部科学省、2013）。

この計画では、小学校中学年では英語教育を「活動型」とし、週1～2コマ程度取り入れ、小学校高学年では「教科型」とし、週3コマ程度取り入れること、また、中学校・高校の英語の授業を「英語で行う」ことを基本

とすることが提言された³⁾。その後、「英語教育強化地域拠点事業」の拠点として217校が選定され、そのうちの116校を占めた小学校では、次の学習指導要領改訂に向けた先進的な取り組みを行うとともに、文部科学省が小学校英語の早期化・教科化に対応するように作成した教材を活用し、東京五輪が開催される2020年に新学習指導要領の全面实施を目指している(文部科学省初等中等教育局国際教育課、2017)。

大学レベルでは、2014年6月23日、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と全国の大学・短期大学は連携協定を締結し、2020年の東京大会に向け、オリンピック・パラリンピック教育の推進とグローバル人材の育成を目指して各大学の特色を生かした取り組みを進めていくと発表した(公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、2017)。その3日後、全国の7つの外大の代表者が集まり、外大の特質を生かしたグローバル人材の育成に向けて様々な連携を図ることを目的とした「全国外大連合憲章」への調印を挙行了した(神田外語大学、2014)。この連合の最初のプロジェクトが神田外語大学が主導する「通訳ボランティア・セミナー」であった。

1964年の東京五輪開催時と現在では、日本人の英語学習を取り巻く環境について大きく異なる点がもう一つある。それは、英語の多様性が顕在化してきたことであり、本セミナーで筆者が講義しているのはまさにこの点である。

2. 「KANDA×TUFS 英語モジュール」の有用性

今日、日本の教育機関では世界の様々な国や地域を出身とする外国人が日本の教育機関で英語を教えている。日本の英語教育は基本的にアメリカ英語を規範とするため、英語教育の現場では、学習者たちだけでなく教える側の教員たちにも混乱が生じている状況が報告されている(関屋・矢頭・マーフィー、2015; 新城・矢頭、2014)。そうした状況のもと、世界の英語の言語学的特徴の学習を可能にするウェブ教材「KANDA×TUFS 英語モジュール」(通称「英語モジュール」)⁴⁾が誕生した。本ウェブ教材は、社会言語学、英語音声学、方言学、第二言語習得の分野における研究

の蓄積に基づいて開発され、World Englishes の研究分野で Kachru が提唱した「三つの円」の概念 (Kachru, 1985) を念頭においてモジュール開発する英語変種を選定した。この概念では、英語を国民の大半が母語あるいは第 1 言語として使う国々を「内部圏 (Inner Circle)」、公用語としてあるいは第 2 言語として使う国々や地域を「外部圏 (Outer Circle)」、外国語として学校教育のなかで教えている国々や地域を「拡張圏 (Expanding Circle)」と称している。本ウェブ教材では、内部圏からアメリカ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アイルランドの英語、外部圏からシンガポールの英語を取り上げ、2017 年現在、これらの 7 つの英語会話モジュールを公開している。なお、シンガポール英語は Kachru の概念では外部圏に属するが、近年、シンガポールの国民の 8 割弱を占める中華系に関しては、(特に高学歴、高収入家庭の) 若年層を中心に、家庭内言語が中国語諸語から英語へとシフトしている、つまり英語が第 1 言語になりつつある言語現象がみられる (矢頭, 2015b)。そのため、シンガポール英語は外部圏から内部圏へと移動しつつある段階にあると捉えることができる。

通訳ボランティア育成セミナーで英語モジュールを活用する意義は次の点にある。まず、プロであれ、アマチュアであれ、「通訳」は多様な英語を理解する能力を備えていなければ務まらない。日本の英語教育の規範となっているのはアメリカ英語であるが、それ以外の英語変種を話す外国人と話す機会も多いはずである。とりわけ世界中から外国人が押し寄せるオリンピック・パラリンピックでは共通語として多様な英語が飛び交う。通訳としては、アメリカ英語のみが正しく優れた英語だという認識を持たず、英語の多様性を理解し、尊重する姿勢が求められる。世界の英語変種に触れることで、規範は一つではないこと、世界の英語変種は等価であり、一つの英語変種が他より優れているわけではない、という意識が高められる (吉富, 2015)。英語モジュールは本来、神田外語大学と東京外国語大学の言語学、英語学、音声学などの授業で使うことを第一の目的として開発されているが、大学生だけではなく、高校生や社会人も多様な英語を理解できるように工夫されているため、本セミナーにおける有用性は高

い。しかも無料でインターネット配信しているため、誰でも費用の負担がなく、気軽に活用できるという利点をもつ。さらにモバイル版もあり、利用者はいつでもどこでもそれを視聴することができる。最近では、通訳の授業や他大学の言語学やコミュニケーション関係の授業でも使われることがあると報告されている。また、英語モジュールで扱った英語圏の国々に、修学旅行で行く中学生や高校生、さらに赴任する前あるいは赴任中の日本人海外駐在員やその家族によって使われる⁵⁾など、大学生以外の利用者が徐々に増えている。

各英語会話モジュールには40の動画があり、前半の20会話(1.挨拶する～20.人を紹介する)では、各国の文化や状況を反映させ、その英語固有の語彙や語法を多く含む会話を集めたスクリプトで構成している。他方、後半の20会話(21.感謝する～40.助言する)では、部分的に語彙や表現をその国のものに変え、その国固有の発音で会話がなされるものの、基本的には同じスクリプトで構成されている。後者を活用することによって異なる英語変種を同列に置いて、それぞれの特徴を容易に比較できることがこの英語会話モジュールの最大の特徴である。

また、字幕と日本語訳に加え、各英語に特徴的な単語、表現、発音、語法、社会的背景についての説明を見ることができる点も大きな特色である(図1、図2、図3の黒い部分)。発音については、各英語の特徴的発音が高校生や一般のユーザーにもわかりやすいように、一部カタカナ表記を用い、他方で、大学の授業でも使えるように国際音声記号や専門用語(「有声」、「長母音」、「声門閉鎖音」など)も併記されている。

さらに、自主学習のためのロールプレイ機能が備えられ、動画に登場する人物の片方あるいは両方の音声を消すことで、学習者が登場人物になりきり、声を出して学習するのにも便利にできている。

なお、英語モジュールには、上記で説明した動画付きの「会話モジュール」の他に、「語彙モジュール」と「発音モジュール」がある⁶⁾。これらは、社会言語学、英語音声学などの研究に基づいて執筆されたテキスト形式の学術的な内容である。このなかで説明されている語、表現、発音をクリックすると「会話モジュール」に飛ぶように設計されており、実際の会話の

なかでどのようにその語や表現が使われているか、発音されているか、という点を学習者は確認することができる。2017 年現在、「語彙モジュール」では「アメリカ英語とイギリス英語の語彙の違い」、「オーストラリア英語とニュージーランド英語の語彙の特徴」、「カナダ英語の語彙の特徴」、「シンガポール英語の語彙と語法の特徴」が公開され、「発音モジュール」では「アメリカ英語とイギリス英語の発音の違い」、「オーストラリア英語とニュージーランド英語の発音の特徴」、「カナダ英語の発音の特徴」が公開されている。

第 1 回から第 5 回までの通訳ボランティア育成セミナーの受講者たちは全国の 7 外大の学生を対象としたが、2017 年夏は高校生、同年秋は早稲田大学の学生を対象とし、外大以外にも広がりを見せ始めた。本セミナーの講義時間は、大学生対象が 90 分、高校生対象が 60 分と設定されているが、この制限時間内で 7 つの英語変種の言語学的特徴を詳しく説明することは到底不可能であるため、本講義⁷⁾では、受講者たちが講義後に自主学習できるように英語モジュールの使い方を指導したうえで、それを活用し、7 つの英語変種の主な特徴について、次で見るように、ポイントを押さえながら要領よく解説することを心掛けている。

3. 多様な英語変種の言語学的特徴についての授業実践

3.1. 世界の二大英語——アメリカ英語とイギリス英語の違い

7 外大の受講者たちは、アメリカ英語とイギリス英語の語彙と発音の違いを漠然と知っている人が多いが、社会言語学など英語の多様性を扱う授業を履修しない限り、それを体系的に学ばないため、本セミナーでは英語モジュールを活用しつつ次のポイントを押さえて教える。

まず、世界で母語として話されている英語の発音は、R 音性的 (rhotic) であるかと非 R 音性的 (non-rhotic) であるかによって、2 つに大別されることをはじめに教える。本セミナーでは、言語学的な用語をなるべく避け、この点について、car や cart といった語で /r/ を発音するのがアメリカ英語、/r/ を発音しないのがイギリス英語である、と説明する。また他の英

語に関し、カナダ英語とアイルランド英語は前者に、オーストラリア英語とニュージーランド英語は後者に属する、と続ける。

アメリカ英語にもイギリス英語にも地域差があるが、英語モジュールで取り上げるアメリカ英語の発音はアメリカ合衆国の広範囲で話されている「一般米語 (General American (GA))」であり、イギリス英語の発音は、従来標準的な発音とされてきた「容認発音 (Received Pronunciation (RP))」(あるいは「BBC 英語 (BBC English)」)ではなく、ロンドンで幅広く話されている「エスチュアリー英語 (Estuary English)」⁸⁾である。本セミナーでは両者を以下のように比較している。

- ① R の音色の母音 (R の後に母音が続かない場合) では、アメリカ英語では /r/ を発音し、イギリス英語では /r/ を発音しない。例えば、car や farm の母音はアメリカ英語では /ɑ:/、イギリス英語では /ɑ:/ となる。また、horse や war の母音はそれぞれ /ɔ:/ と /ɔ:/、bird や fur の母音はそれぞれ /ɔ:/ と /ɔ:/ となる。
- ② short (flat) “A” と long (broad) “A” に関しては、たとえば bath や ask の母音はアメリカ英語では /æ/、イギリス英語では /ɑ:/ となる。
- ③ caught, saw などの長母音は、アメリカ英語では /ɑ:/ となることが多く、イギリス英語では円唇化して /ɔ:/ となる。
- ④ go, coat, show の二重母音に関しては、アメリカ英語では /oʊ/ となるが、イギリス英語では母音の始まりの舌の位置が下がり、/əʊ/ となる。
- ⑤ R の前の母音でかつ R の後に母音が続く場合、例えば hurry や courage の下線部の母音はアメリカ英語では /ɑ:/、イギリス英語では /ʌ/ となる。また、Mary や various に関しては、アメリカ英語では /e/ あるいは /æ/、イギリス英語では弱母音が入って /eə/ となる傾向がある。Mary という女性の名前が日本語に訳される場合、「メリー」と「メアリー」があるのは、前者がアメリカ英語を、後者がイギリス英語の発音を聞いて、そのように表記された可能性がある、と指摘する。
- ⑥ 個別の単語として tomato と vase の下線部の母音は、アメリカ英語では /eɪ/ となり、イギリス英語では /ɑ:/ となる。tomato に関してはア

アメリカ英語では二番目の /t/ が有声化することがあり、vase に関してはイギリス英語では /s/ が有声化して /z/ となる。

- ⑦ secretary や ceremony など -ary (-ery)、-ony で終わる語はアメリカ英語とイギリス英語でアクセント型が異なる。アメリカ英語では第一アクセントの後の第二アクセントが保たれるが、イギリス英語では消失することが多い。したがって、上記の語はアメリカ英語では /sɛkrətəri/、/sɛrəmɒni/、イギリス英語では /sɛkrətri/、/sɛrəməni/ となる。
- ⑧ Tuesday、new、duty といった語では、いわゆる「ヨッドの脱落」という言語現象がアメリカ英語で起こることが多い。つまり、下線部の /ju:/ が /t/、/d/、/θ/、/n/ の後に続く場合、/j/ が脱落し、/u:/ となる。わかりやすく言えば、例えばアメリカ英語で new は「ヌー」に聞こえることが多い。
- ⑨ アメリカ英語の自然会話では、better、party、water などの語では /t/ の異音として有声化した [ɾ] が使用されることが多く⁹⁾、「ベラー」、「パーリー」、「ウォーラー」のように聞こえる。他方で、イギリス英語では better などの語で声門閉鎖音化した [ʔ] が使われることがある。会話モジュールではイギリス英語の「1 番: 挨拶する」に出てくる better が声門閉鎖音で「ベッア」のように発音されている。また、アメリカ英語の自然会話では、twenty や internet など /n/ の後の /t/ が脱落することが多く、「トゥエニー」、「イナーネット」のように聞こえる。さらにアメリカ英語では mountain や button の /t/ が声門閉鎖音になることがあり、この点に関し、会話モジュール「5 番: 手段についてたずねる」を活用して、これに出てくる button が「/t/ が声門閉鎖音、「バッアン」のように聞こえる」と説明する。

発音に関しては上記の 9 つのポイントを押さえるが、語彙の違いについては数が膨大であるため、本講義ではいくつか言及するのみで、「語彙モジュール」の「アメリカ英語とイギリス英語の語彙の違い」を自分で学習することを受講者に奨励する。アメリカ英語とイギリス英語の違いを教えるとき、会話モジュール「27 番: 程度についてたずねる」の動画を活用することが多い(図 1 と図 2)。この会話に出てくる tomato の発音は「アメ

リカ英語では /eɪ/、イギリス英語では /ɑ:/。二番目の /t/ は有声で「トゥメイロウ」のように聞こえる」と説明されている。また、27 番では語彙に関

図1 英語会話モジュール・アメリカ英語「27 番: 程度についてたずねる」の動画

神田外語大学・東京外国語大学 英語モジュール > アメリカ英語

27 程度についてたずねる

程度についてたずねる

テキスト表示 ON

ムービー表示 ON

表示/非表示切替

英語 日本語

TEXT

B: 実はいくつかお聞きしたいことがあるのですが。
Actually I have a couple of questions.
ここにトマト スープは辛いと書いてありますが、正確に言うときどくらい辛いんですか?
Here it says that the tomato soup is spicy, but I was wondering, just how spicy is it?

A: うーん、そんなに辛くはないですよ。
Um, it's actually not that spicy.
最後に少しピリッとするくらいです。強が出たりする程度ではありません。
Just has a little bit of a kick at the end. It won't make you cry or anything.

B: わかりました。悪くありません。
Oh okay. That's not so bad.
それと風のグリルも気になっていました。
And I was also looking at the grilled clams.

MOVIE

"tomato"は米英語では/eɪ/、英英語では/ɑ:/。"tomato"の2番目の/t/は有声で、「トゥメイロウ」のように聞こえる。"but"の/t/は有声で、次の"t"と繋げて発音され「ライ」のように聞こえる。
"just"は"exactly"の意味。「正確に/まさに」

(神田外語大学専用サイト http://labo.kuis.ac.jp/module/module/en_us.html#/jp-27)

図2 英語会話モジュール・イギリス英語「27 番: 程度についてたずねる」の動画

神田外語大学・東京外国語大学 英語モジュール > イギリス英語

27 程度についてたずねる

程度についてたずねる

テキスト表示 ON

ムービー表示 ON

表示/非表示切替

英語 日本語

TEXT

B: ちょっとお尋ねしたいことがあるのですが。
I have a couple of questions if that's okay.
こちらにトマト スープが辛いと書いてありますが、どれくらい辛いでしょうか?
Here it says that the tomato soup is spicy but I was wondering, just how spicy is it?

A: ええと、それほど辛くはないですよ。
Um, it's actually not that spicy.
終りに少しピリッとするくらいです。
Just has a little bit of a kick at the end.
強が出るほどではありませんよ。
It won't make you cry or anything.

B: そうですが、良かったです。
Ah, okay. That's not so bad.
あと、ステーキなんですが。
And I was also looking at the steak.

MOVIE

"tomato"は英英語では長母音/ɑ:/、米英語では二重母音/eɪ/。
"just"は"exactly"の意味。「正確に/まさに」

(神田外語大学専用サイト http://labo.kuis.ac.jp/module/module/en_uk.html#/jp-27)

しても、「フライドポテト」は「イギリス英語では chips、アメリカ英語では French fries が一般的」と説明されている。

3.2. オーストラリア英語とニュージーランド英語の特徴

オーストラリア英語でよく使われる挨拶は“Gooday.”(G'day とも綴る)であり、人が良い行いをしたときに使われる慣用句は“Good on ya!”であるという点をそれぞれ会話モジュールの1番と38番(図3)を活用して解説する。オーストラリア英語とニュージーランド英語は語彙において共通点が多いが、ニュージーランド英語特有の語もある。特に、マオリ語起源の語が特徴的で、挨拶でマオリ語の“Kia Ora.”がよく使われるということをもマオリ人の血を引く神田外語大学の男性教員が出演している会話モジュールの1番を活用して説明する(図4)。

オーストラリア英語とニュージーランド英語の語彙に共通する点とし

図3 英語会話モジュール・オーストラリア英語「38番: しないでくれという」の動画



(神田外語大学専用サイト http://labo.kuis.ac.jp/module/module/en_au.html#/jp-38)

図4 英語会話モジュール・ニュージーランド英語「1番: 挨拶する」の動画



(神戸外国大学専用サイト http://labo.kuis.ac.jp/module/module/en_nz.html#/jp-01)

て、省略した言い方が好まれるということがいえる。例えば、barbecue の代わりに barbie、football の代わりに footy、cans of beer or drink の代わりに tinnies などであり、これらは両英語変種の会話モジュールのいくつかの場面に出てくる。

発音に関しても両英語変種は共通点をもつ。よく指摘されるのは、会話モジュールの随所に出てくる mate や gooday などの語の下線部の二重母音 /eɪ/ の始まりの舌の位置が低めで発音され、場合によっては [æɪ] になる(「アイ」のように聞こえる)ほど低くなることがあるという点である。したがって、gooday が「グッダイ」のように聞こえる。また、pad や have などの /æ/ は舌の位置が高くなって [ɛ] (日本語の「エ」より口をやや大きめに開いて発音する)と発音される。

なお、pin や chips などの /ɪ/ はオーストラリア英語とニュージーランド英語では変化の方向が異なっており、オーストラリア英語では舌の位置が高くなって [i] で発音され(日本語の「イ」とほぼ同じ)、ニュージーランド英語では低くなると同時に中よりになり、[ə] (日本語にはない音で、口

の力を抜いて発音する)で発音される。したがって、ニュージーランド英語では fish and chips が「フッシュンチュップス」のように発音される。講義ではこの語が出てくるニュージーランド英語会話モジュール「13 番: 妥協させる」を活用してこの点を認識させる。

3.3. カナダ英語の特徴

日本の英語学習者たちはカナダ英語に関して様々な印象をもっているが、本講義ではアメリカ英語とカナダ英語のセリフが共通の会話モジュールを活用し、両英語変種の発音自体は同じに聞こえることを認識させる¹⁰⁾。カナダ英語とアメリカ英語に発音の違いがあるとすれば、「カナディアン・レイジング」を挙げることができる。これは、about や house などの語のように、無声子音が後に続く二重母音 /aʊ/ の出発点が、カナダ音がアメリカ音 (GA) よりも高く、[aʊ] と発音される言語現象である。これは微細な特徴であり、これについて学んだ人でなければ気づかない(矢頭、2014) ことを本講義では指摘し、この点を会話モジュールを使って認識させる。また、sorry や tomorrow などの語の下線部の母音の発音がアメリカ音では、舌の位置が下がり、非円唇母音の /ɑ:/ (日本語の母音の「オ」と「ア」の間くらいの母音に聞こえる) が、カナダ音では中程度の円唇の中高母音 /o:/ になる傾向がある(矢頭、2015a)。会話モジュール「23 番: 謝る」に出てくる「sOrry の /r/ の前の母音は、カナダ英語では円唇化し、「ソーリー」のように聞こえる。アメリカ英語では「サーリー」のように聞こえることが多い」という発音説明でこの点を認識させる。

語彙に関しては、カナダ英語では生活用語全般においてアメリカ英語と同じ語彙が圧倒的に優勢であるが、語によってはイギリス英語の語が使われる。例えば「蛇口」はカナダ英語ではイギリス英語と同じ tap を使い、アメリカ英語の faucet はほとんど使われない。また、「トイレ」のことを washroom というなど、カナダ固有の単語もある。本講義では時間の制約上、カナダ英語の語彙については語彙モジュールの「カナダ英語の語彙の特徴」を自主学習するように奨める。カナダ人の話し方に特徴的な eh という談話標識¹¹⁾については、会話モジュール「38 番: しないでくれという」

図5 英語会話モジュール・カナダ英語「38番: しなくてくれという」の動画



(神田外語大学専用サイト http://labo.kuis.ac.jp/module/module/en_ca.html#/jp-38)

(図5)を活用して説明する。

3.4. アイルランド英語の特徴

アイルランド人の英語教員は近年、日本の英語教育現場で増えつつある¹²⁾が、アイルランド英語がどのような英語であるのかについては日本ではほとんど知られていない。本講義の受講者たちに尋ねると、「アイルランドという国はイギリスの方にあるのでイギリス英語に似ているのではないか」といった推測が返ってくる。しかし、アイルランド英語はアメリカ英語とカナダ英語と同様に、car や cart といった語で、母音のあとの /r/ を発音する R 音性的な (rhotic あるいは r-ful) 英語である。この点について、本講義では受講者たちに会話モジュール「1 番: 挨拶する」(図6)の work、finer、weather を聞かせ、/r/ が発音されているのを認識させる。他方で、アイルランド英語特有の発音もあり、例えば、非円唇母音の /ʌ/ (「ア」) が、円唇化して「ウ／オ」のような音で発音される点が挙げられる。luck は

図6 英語会話モジュール・アイルランド英語「1番：挨拶する」の動画



(神田外語大学専用サイト http://labo.kuis.ac.jp/module/module/en_ie.html#/jp-01)

「ラック」ではなく、「ロック」(「ルック」)のように、otherが「オザー」(「ウザー」)のように聞こえることをそれぞれ「2番：注意を引く」と「8番：意見を述べる」を活用して認識させる。さらに、「29番：数字についてたずねる」を活用し、thirtyの /θ/ が [t] で発音され、「ターティー」のように聞こえる点、thoseの /ð/ が閉鎖音 [d] で発音されている点を認識させる。

アイルランド英語の語彙に関しては、生活用語はイギリス英語と同じ語彙が多く使われる。例えば、「ポテトチップス」はchips、「ガソリン」はpetrolが使われる。他方で、アイルランド英語固有の語や表現もあり、例えば、「1番：挨拶する」に出てくるように「元気です」は“Fine.”の代わりに“Grand.”が使われる点、“It was fun.”の意味で“It was craic.”と言う点などを会話モジュールで説明する。

3.5. シンガポール英語の特殊性

この講義で扱う7つの英語変種はそれぞれに特徴があるが、唯一アジア英語として開発したシンガポール英語は他の英語変種とは格段に異なる。本講義ではいわゆる「シングリッシュ (Singlish)」と呼ばれる口語体シンガポール英語¹³⁾に焦点を当てる。シングリッシュの特徴として最も挙げられるのは、福建語など中国語諸語を語源とする lah, leh, lor, ah, ma といった間投詞を文末に入れることであり、会話モジュールの随所に出てくる。中国語諸語の語や表現が多く使われ、例えば福建語の paiseh (「怕羞」) は embarrassing という意味で使われ、“Excuse me.” (「すみません。」) という意味で使われることもある。また、マレー語由来の語もあり、「食べる」の意味で、eat ではなく、マレー語の makan が使われる。

語法も特有のものが多くあり、例えば「来週末、来れますか (“Can you come next weekend?”)」を “Next weekend can?” と言い、それに対する答え「はい、来れます。 (“Yes, I can.”)」が “Can.” (中国語で「～できる」と

図7 英語会話モジュール・シンガポール英語「3: 人にものをあげる」の動画

The screenshot displays a web-based English conversation module for Singaporean English. The interface is divided into two main sections: 'TEXT' on the left and 'MOVIE' on the right. The 'TEXT' section shows a dialogue between two characters, A and B, with their respective lines of conversation. The 'MOVIE' section shows a video player with a play button and a progress bar. The video shows two men in a modern setting, likely a shopping mall or office building. The interface also includes a top navigation bar with the text 'シンガポール英語' and a search bar. There are also buttons for 'テキスト表示' (Text Display) and 'ムービー表示' (Movie Display), both set to 'ON'. A status bar at the bottom indicates the current page and provides a link to the module's documentation.

(神田外語大学専用サイト http://labo.kuis.ac.jp/module/module/en_sg.html#/jp-03)

いう意味の「会」となることを、この語法が出てくる「22 番：自己紹介する」を活用して説明する。

発音については、語末の子音が発音されないことが多く、長母音が単母音になる傾向があるため、例えば「3 番：人にものをあげる」(図 7)に出てくる“quite late”が「クワイッレツ」のように聞こえる。また、「21 番：感謝する」に出てくる morning や nothing など、通常、第一音節にアクセントがある語は、第二音節にアクセントが置かれる傾向があることも指摘する。

シンガポール英語について教える際、その言語学的特徴を教えるだけに留めると、受講者にはただの「聞き取りにくい英語」という認識で終わってしまう。そこで、本講義では、「シングリッシュは、シンガポールで自然に発生し、そこで進化した話しことばであり、シンガポール人にとっては合理的な話し方であり、親しい間柄では自分たちの気持ちを最も自然に表現出来る「彼らの英語」なのである。」¹⁴⁾と強調する。この点を具体的に示すため、前述の can の独特な語法を取り上げ、シングリッシュには語数が少なくて済むといった合理性やシンガポール人の多民族的要素を取り入れた独自性があることを説明する。そして、シンガポール人が英語を彼らのニーズに合うようにアレンジして自分のものにし、社会の共通語として日常的に使っているという点を受講者たちに認識させる。

4. 受講者たちの反応

冒頭で触れたように、日本の英語教育ではアメリカ英語が規範となっており、大学の英語教育においては、学生たちは英語音声学を履修すれば、アメリカ英語とイギリス英語の発音の違いについて学ぶ機会はあるが、World Englishes についての社会言語学的な授業を履修しない限り、多種多様な英語変種を体系的に学ぶ機会はない。本講義で受講者たちがアメリカ英語とイギリス英語の違いについて学んだ後、オーストラリア英語会話モジュールの最初の会話を聞かされると、その多くが未知の世界に足を踏み入れたかのような表情を見せる。口語体シンガポール英語(シングリッシュ)に至っては驚愕の表情さえ見せる受講者もいる。

筆者の通常の大学の授業においても、シンガポール英語に対する学生の反応は、他の英語変種に比べて格段に大きい。授業でシングリッシュを初めて学生たちに聞かせるとき、「非常に聞き取りにくい」、「お手本にしたくない」といった否定的なコメントを示す学生が多い。しかし、シングリッシュの言語学的特徴を英語モジュールを活用して学習させると、その特徴を捉えて聞き取れるようになる。また、シングリッシュの合理性と独自性、シンガポール人による英語の独特な現地化と使いこなしについて解説すると、学生たちのシンガポール英語に対するイメージが向上する傾向がある。筆者が社会言語学の授業でこのように教えた後に集めたシンガポール英語についての授業に関するリアクション・ペーパーでは、「シンガポール英語に対して面白い、もっと知りたいと思えるようになった」、「英語を彼らなりに使いやすいものとし、それを堂々と使っていることは素晴らしいと思った」、「聞き取りにくい部分もあるが、日本人と同じアジア人が話す純粋な第1言語としての英語ではなく、ローカライズされたシンガポール流の英語に魅力を感じるようになった」といったシンガポール英語に対する肯定的な意見が大多数であった¹⁵⁾。また、このウェブ教材が多様な英語変種を理解するのに役に立ったか、との質問に対し、「英語の変種にもともと興味があったが、それを学ぶ方法がなかったので大変役立つ」、「今後、英語の変種を聞き分ける楽しみができた」といった意見が多くみられた(新城・矢頭、2014)。

通訳ボランティア育成セミナーでは、通常の大学の授業のように数回に分けて詳しく多様な英語変種について教えることはできない。一回きりの90分(あるいは60分)の講義では、7つの英語変種の主な特徴しか教えられないからこそ、講義で学んだことをスタート地点にし、あとは自力で学ぶよう奨励する。そのため、どの程度、受講者たちが本講義が伝えたいことを学ぶことができるのか、追跡調査をしない限り、知ることができない。しかし、本セミナーで受講者たちが各講義について書いた感想を見ることによってある程度それがわかる。その代表的な感想をいくつか紹介する¹⁶⁾。

- ◆たくさんの国の音声を聞けて、すごく魅力的でした。サイトも教えて頂き、使ってみようと思います。正直シンガポールの言葉はあまり聞き取れなかったですが、オリンピックにはどこの国の人が来て、いつどのタイミングでお話をするか分からないので、どこの国の方の言葉も聞き取れるようになることを目標に頑張りたいです。(京都外国語大学1年)
- ◆通訳をすると、色々な英語に触れることになると思います。そのとき自分が話せなくても聞き取ることができれば、通訳にはとても役立つと思います。各国の英語の差異が誤解を生むこともあると思うので、今回学ぶことができて良かったです。(神戸市外国語大学2年、女性)
- ◆世界中にはさまざまな母国語訛りの英語が存在します。今や世界の共通語である英語と言われていますが、この英語にもさまざまな英語があり、時には理解しづらい英語のときもあります。私達が2020年の東京オリンピック・パラリンピックでボランティアをする際、この状況に必ず出くわすと思います。その際、世界の英語における知識をもっておくこと、さまざまな訛り英語に慣れ親しんでおくことで、難なくこなせるだろうと感じました。(神田外語大学2年)
- ◆私はTUFUS言語モジュールを利用していますが、世界の英語モジュールというプログラムがあることを知らなかったのが、今回の講義で使用方法やコンテンツを知ることができたので、今後活用していきたいと思いました。「英語」と一口に言っても、様々な英語が存在するので、興味深いと思いました。(東京外国語大学2年、女性)
- ◆私は大学で英語を学んでいますがこの講義の中で扱ったシングリッシュなどは初めて具体的に学びました。海外から来る観光客はアメリカ英語を全員が使っているわけではありません。そのため様々な国の英語も知っておくことが必要だと感じました。(関西外国語大学1年)
- ◆世界の英語の違いを比較しながら学べるサイトがあったことを今まで知らなかった上に、使ってみるとどんどん興味が湧いてきて、今では毎日閲覧しています。何も知らずにシンガポールの方と接するのと、シングリッシュの知識があって接するのとは全然違うのではないかと思います。これからも勉強を続けていきたいです。(神田外語大学2年)

- ◆私たちが長らく正解不正解のハッキリとした義務教育として習ってきた英語における多様性の講義は、これから実際に話す英語を使用していく私たち外大生にとって特に貴重なものであったと思います。現地に適応し時代と共に変化していった生きた英語を知ったことで、これまで10年近く自分の習ってきたものが如何に死んだ凝り固まったものであったのかということのをよく理解できました。(神戸市外国語大学2年)
- ◆同じ英語でも、国によってまったく発音が違ったり、その国独自の言葉があるということが面白いと感じました。授業で紹介された「英語モジュール」を使い、勉強を継続させていきたいです。(名古屋外国語大学1年)
- ◆比較文化論の題材として様々な国の英語を比較するのが面白かったです。発音が違う、スペルが違う、語尾が特徴的…なんとなく聞いたことがあっても実際映像と音声で比べてみると全然違っていました。文化を理解するにあたり比べることで見えてくることもあると思うのでとても興味深い講義でした。東京オリンピックなど世界大会で考えると、同じ英語でも全く違うように発音する様々な国の人々が日本にやってきたとき、ちゃんと理解できるようにしていないと通訳もうまくできないのではないかと思います。(関西外国語大学2年)
- ◆この講義を通して通訳ボランティアとして活躍するために幅広い英語を用いる必要があることを実感したため、日常的に英語モジュールを用いて国際的に通じる英語を身に付けられるようにしたい。(長崎外国語大学1年)

上記の感想を見る限り、この一回きりの短い講義で、受講者たちはシンガポール英語の独自性と合理性まで十分に理解できたか、という点は定かではない。しかし、少なくとも「英語の規範は一つではない」という筆者のメッセージが伝わり、継続して英語モジュールが自主的に活用されるだろう、という感触は得られた。

5. 課題と展望

4日間開催される本セミナーは有料であり、首都圏以外からやってくる参加者たちは旅費も工面しなければならない。参加者全員が自らの強い意志で参加したと思われる本セミナーではどの講義にも熱気があり、彼らの学ぶ姿勢は真剣そのものであった。筆者が講師として本セミナーに参加して強く感じ取ったことは、「外大」という一つの括りには意義がある、という点である。講義中、筆者は「とにかくことばについて学ぶことが好き」という外大生の特質を彼らの眼差しから感じ取ることができた。全国の「外大生」が一堂に会するのは初めての試みであり、交流することによって参加者たちは互いに同じカラーを感じたに違いない。

本セミナーの一回きりの講義で、通訳にしろ、多様な英語変種の特徴の学習にしろ、受講者たちが十分に習得することは不可能である。本セミナーは「オリエンテーション(方向づけ)」と捉えるべきで、その後の向上は、受講者たちのやる気にかかっている。その点、英語モジュールは無料かつユビキタスなツールであるため、受講者たちはやる気さえあれば自主的に学習を継続することができる。

本セミナーが回を重ねるごとに、英語の多様性を教える講師として課題点が見えてきた。時間の制約上、受講者たちは、一つ一つの英語変種の特徴について講義中に十分に学ぶことができない。そこで、アメリカ英語をはじめとする「6つの内部圏の英語」とシンガポール英語をはじめとする「アジア英語」¹⁷⁾に本講義を分割し、前者を初級コース、後者をアドバンスコースとして開講することができれば、踏み込んだ内容の学習が可能となろう。後者では、英語がアジアの共通語であること、規範は英語母語話者のみによって作られるものではないことを受講者たちに認識してもらいたい。日本では英語母語話者の英語を基準とする傾向が根強いからである(村田・飯野・小中原、2017)。

英語の多様性を教える観点からみるグローバル人材育成は、様々な英語変種に対する理解力だけでなく、英語変種を超えたコミュニケーション能力を達成することを究極の目標とすべきであると筆者は考える。英語モジュールを活用した授業はこれまでのところ、理解する能力の育成を目的

としてきた。しかし、オーラル・コミュニケーションは受信と発信の双方によって成立する。今後は、英語の多様性に対する気づきを高めた受講者たちがグローバル社会において、英語変種を超えた、つまり多様な言語文化背景出身の英語使用者らと円滑に意思疎通を図れるコミュニケーション能力を身につけることができるか、という点に着目した英語教育を模索したい。本セミナーでこれを実現するには、通訳担当の講師陣と連携して、「共通語としての英語 (English as a lingua franca)」の視点を取り入れた英語教育を開発することが重要となろう。

注

- 1) 公益財団法人日本英語検定協会は「日常の社会生活に必要な実用英語の習得及び普及向上に資するため、英語の能力を判定し、また様々な機会を通じてその能力を養成することにより、生涯学習の振興に寄与すること」を目的として、1963年に創設された (<http://www.eiken.or.jp/association/>)。
- 2) TOEIC (Test of English for International Communication) は、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC: The Institute for International Business Communication) の中心事業として英語によるコミュニケーション能力を評価するテストとして創設された。テスト内容は身近な事柄からビジネス関連の事柄までをカバーしている (<http://www.iibc-global.org/index.html>, 2017年10月25日閲覧)。
- 3) この計画について、日本外国語教育改善協議会は、「外国語」が「英語」にすり替わっていることに抗議し、「公教育は、必修教科「外国語」において「英語一辺倒」の外国語教育から脱却し、多様な外国語の学習を保証すべきであること」と意見するなど、文部科学省が提唱する外国語教育の在り方について全般的に異論を唱えた (日本外国語教育改善協議会、2014)。
- 4) 「英語モジュール」は神田外語大学と東京外国語大学の専用サイトで公開されている。その開発の意義と特徴および開発方法などについては関屋・矢頭・マーフィー (2015) を参照されたい。
- 5) 例えば、シンガポールに駐在中の日本人主婦は「この教材で耳を慣らして、目で英文の意味を確認しておけば街へ出て、何を言っているかわからなくて困惑する、ということは減ると思います。」とコメントしている (Ameba ブログ <https://ameblo.jp/shn2015/entry-12243792027.html>)。
- 6) 「会話モジュール」は科学研究費基盤研究 (B) 「社会言語学的変異研究に基づく英語会話モジュール開発」 (課題番号: 24320106) によって開発された。他方で、「語彙モジュール」と「発音モジュール」は神田外語大学研究助成及び神田

英語の多様性について教える観点からみる通訳ボランティア育成

外語大学グローバル・コミュニケーション研究所共同研究プロジェクト助成金によって開発された。

- 7) 筆者が講師として本セミナーで担当した講義のタイトルは「世界の英語」、「比較文化論」、「外国語でおもてなし」であったが、いずれも本稿の授業の内容である。
- 8) 従来、イギリス英語の標準とされてきた「容認発音 (Received Pronunciation (RP))」は上流階級の子弟が全寮制のパブリックスクールで身に付けた発音が元となっているとされる社会階層の方言で、話者の数はイギリスの人口の数パーセントもない。そこで近年では、RP とロンドンの労働者階級の社会方言とされるコクニー (Cockney) との中間的なタイプの英語が支配的になってきた。これは、ロンドン以東のテムズ河の河口域から広まったことから「エスチュアリー英語 (Estuary English)」と呼ばれ、RP に近い発音の話者からコクニーに近い話者までいる。(KANDA×TUFS 英語モジュール「イギリス英語」最初のページ、http://labo.kuis.ac.jp/module/module/en_uk.html#/jp-00、2017 年 11 月 10 日閲覧)
- 9) /t/ が有声化した [ɾ] の使用はイギリス英語ではあまり見られないが、近年増えてきていると報告されている (新城、2015)。
- 10) カナダ英語とアメリカ英語は主な音韻的特徴を共有し、カナダ人やアメリカ人でも音韻面で両英語変種の区別することができないことが数々の社会言語学的研究によって示されている (矢頭、2014)。
- 11) eh はカナダ人がよく使う談話標識として知られ、カナダ人のアイデンティティ・マーカーとして取り上げられることが多い (矢頭、2015a)。
- 12) 小・中・高等学校に配属される外国語指導助手 (ALT: Assistant Language Teacher) の招致相手国は、2014 年度、多い順に、アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ、アイルランド、ジャマイカ、シンガポールであったことが報告されている (関屋・矢頭・マーフィー、2015)。
- 13) 教育レベルが高いシンガポール人は言語的レパートリーが広く、英語の変種をドメインによって使い分けている。彼らは、大学や大手企業などのフォーマルなドメインでは「シンガポール標準英語 (Standard Singapore English)」を使用し、家族や親しい友達などインフォーマルなドメインではシンガポール特有の「口語体シンガポール英語 (Colloquial Singapore English)」、いわゆる「シングリッシュ (Singlish)」を話す。低学歴のシンガポール人は、英語のレパートリーが狭く、口語体シンガポール英語しか話せない傾向がある (矢頭、2015b)。
- 14) これはシンガポール英語の会話モジュールと語彙モジュールの最初のページで強調している文言である。
- 15) 筆者が担当する「社会言語学 I」の授業のなかで、7つの英語会話モジュール

を活用した授業(90分授業5回分)の最終日(2017年7月20日)に受講者62名にリアクション・ペーパーを書いてもらった。

- 16) ここで取り上げた受講者たちの感想は、通訳ボランティア育成セミナーの第1回目(2015年8月開催)、第2回目(2016年2月開催)、第3回(2016年9月開催)、第5回目(2017年9月開催)で集めたものの一部である。
- 17) 2018年度以降、英語モジュールには「インド英語」などのアジア英語のコンテンツが追加される予定である。

参考文献

- 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会(2017) <http://www.iibc-global.org/index.html> (2017年10月25日閲覧)
- 新城真里奈・矢頭典枝(2014)「大学における英語変種を教える試み—TUFS×KANDA 英語モジュールの開発を事例に」『外国語教育研究』第17号、外国語教育学会、127-146頁
- 新城真里奈(2015)「英語モジュールにみる内部圏の英語変種における発音の諸相」『グローバル・コミュニケーション研究』2号、57-72頁
- 神田外語大学(2014)「全国外大連合憲章調印式を举行」http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/kuis_news/detail/0510_0000002028.html (2017年11月5日閲覧)
- 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会(2017)「大学連携」<https://tokyo2020.jp/jp/get-involved/university/> (2017年11月5日閲覧)
- 公益財団法人日本英語検定協会(2017)「協会について」<http://www.eiken.or.jp/association/> (2017年10月25日閲覧)
- 関屋康・矢頭典枝・マーフィー、フィリップ(2015)「KANDA×TUFS 英語モジュール——開発の意義と特徴——」『グローバル・コミュニケーション研究』第2号、1-17頁
- 全国外大連合(2015)『第1回通訳ボランティア育成セミナー報告書』
- 全国外大連合(2016a)『第2回通訳ボランティア育成セミナー報告書』
- 全国外大連合(2016b)『第3回通訳ボランティア育成セミナー報告書』
- 全国外大連合(2017)『第5回通訳ボランティア育成セミナー報告書』
- 日本外国語教育改善協議会(2014)「「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」等に対する意見」
<http://www.shin-eiken.com/info/2014/img/20141017demanding.pdf> (2015年11月5日閲覧)
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説外国語活動編』
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課(2017)「「英語教育強化地域拠点事業」における取組及び小学校英語の早期化・教科化に対応した補助教材等の検証について」(資料2-4)

英語の多様性について教える観点からみる通訳ボランティア育成

- 村田久美子・飯野公一・小中原麻友 (2017) 「EMI (英語を媒介とする授業) における「共通語としての英語」の使用の現状把握と意識調査、および英語教育への提言」『早稲田教育評論』31 巻、1 号、21-38 頁
- 矢頭典枝 (2014) 「カナダ英語の特徴に関する一考察: 日本人英語学習者の言語意識の視点から」『カナダ研究年報』34 号、37-56 頁
- 矢頭典枝 (2015a) 「英語モジュールにみるカナダ英語の特徴」『グローバル・コミュニケーション研究』2 号、73-91 頁
- 矢頭典枝 (2015b) 「シンガポールの言語状況と言語教育について: 現地調査から」平成 24-26 年度科学研究費補助金研究 基盤研究 (B) 研究プロジェクト報告書『アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究』59-75 頁
- 吉富朝子 (2015) 「世界の英語変種と第二言語語用論に対する意識を高めるための統合型学習のすすめ: 国際英語のコミュニケーション能力を養うために」*Computer & Education*、39 巻、26-31 頁
- Kachru, B. B. (1985) Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the Outer Circle. In Quirk, R. & H. Widdowson (eds.), *English in the World* (pp. 11-30). Cambridge University Press.
- Yazu, N. (2016) The Volunteer Interpreter Training Project: The Challenge of Seven Foreign Studies Universities (Gaidais). *Culture, Identity and Citizenship in Japan and Canada*, 東京大学社会科学研究所 ISS Research Series 59, pp. 39-52.
- 〈英語モジュール URL〉
- 「神田外語大学×東京外国語大学 (KANDA×TUFS) 英語モジュール」<http://labo.kuis.ac.jp/module/>
- 「東京外国語大学言語モジュール 英語」<http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/en/>